

# あるむぜお54

府中市郷土の森だより

al museo NO 54

2000年12月20日



2 府中宿再訪 Part3 府中宿を往く人と住む人—出会いと別れ—

3 展示への招待 特別展ワイルドライフ写真大賞展

4-5 ノート もうひとつの鎌倉街道

6 最近の発掘調査 埋められた渡来銭 整理作業中間レポート2

7 収蔵資料の紹介 縄文人が埋めた石斧

8 ナチュラルセブン 第3話 調査団西へ

府中宿を往く人と住む人  
—— 出会いと別れ ——

馬場治子

表紙の絵は、大田蜀山人が狂歌の門人である馬蘭亭(山道高彦)に書き送った手紙などを貼り交ぜてある巻物「蜀山人自筆文書」の中の一枚です。専門家の研究によれば絵は彼の手ではないのですが、中央に「大晦日府中の市の図」とあります。

店を出している商人は、ざる屋・魚屋・をでん・な(菜)・足袋売・古着屋・手ぬぐいや・古道具屋、その他野菜や下駄などもあるようです。なんだか皆大きな籠を背負っています。これに暮れの買物を入れて帰るのでしょう。せわしない時節に見世物見物している人達もいるようです。

大田蜀山人は“超”のつく位有名な江戸中期の文化人ですが、一方で幕府勘定方の役人という顔も持つマルチ人間です。

"彼は、文化5年12月から6年(1809)4月の間、玉川の治水監察という公務を帯びて多摩川中流域を何度も往来していました。さすがに大晦日と元旦は仕事が休みで、玉川の岸近い是政村の旧家に宿っていました。

絵の左上隅に「大晦日此市へ酒の肴買二やりしに肴なし 雉子山鳥斗也 たまごもなし 不自由是二てしるべし」と小さい字で書かれている記述は、この出張中の記録「調布日記」の記述と合致しますので、使いに出した下役にでも絵を画かせたのでしょうか。府中宿の賑わいを知る貴重な一枚です。

上の通、この日蜀山人は宿場に出かけていませんが、前日通りかかった折りに、40年ぶりの懐かしい人に出会いました。相手は宿場で“四人部屋”という旅籠を営む野村瓜州です。

実は蜀山人の府中訪問は2回目です。最初はその記録「三餐餘興」によれば、明和4年(1767)まだ19才という若さの盛り、友人3人と連れ立って1泊2日の旅でした。

閏9月4日、前の晩は雨で心配しましたが、夜明けには明星が輝いて一安心。牛込御門を出て四谷から高井戸に到ります。内藤新宿が再興される

のは明和9年なので、高井戸が甲州街道の最初の宿場でした。

ここから野っ原を僊川(仙川)に沿って3,4里も行き、左に入ると国分寺です。古瓦を拾ったり、先頃亡くなった旧知の服部仲英撰文の国分寺碑に涙したりして過ぎました。

ケヤキ並木に出ればらく行くと府中です。まず蕎麦と酒で腹ごしらえをして「府中佳味也」と満足そうです。六所宮では国分寺でもしたように、祠の後ろに名前を書いたとあります。今でも探せば彼の署名が見つかるかもしれません。

その後、府中に行くなら是非泊まれと勧められた“四人亭”に行ってみて、その蔵書に驚きます。

瓜州は彼らを玉川に案内します。夕暮れの景色は蜀山人をいたく感動させ「遊玉川」と題する漢詩になりました。

翌日目の出の玉川を見に行き、一匹の蛇のようだとして評した後、江戸への帰途に就きました。後年玉川と半年近くも付合うことになるのは、本人にもまだ想像できないことでした。

蜀山人との再会から2年後に野村瓜州は亡くなりますが、その墓石の撰文は蜀山人によるものです。



「甲州道中商人鑑」に載る“四人部屋”の広告  
この本には、各宿場の旅籠屋が紹介されています。彦六は瓜州の次の代の人。(山梨県立図書館蔵)

惑星“地球”の誕生から約46億年。膨大な時を費やし、地球上には様々な環境が造られていった。中でも“海”の存在は生命誕生という奇跡を生んだ。生命は植物と動物に分かれ、やがて進化の過程で陸上や空に生活の場を求める種が登場した。お互いがそれぞれの環境に適応し、複雑な関係を見事に保ちながら、時には助け合い、そして時には闘いを繰り広げながら歴史を綴ってきた。少なくとも人類という種族が出現するまでは、弱肉強食の原理に基づいたありのままの自然が“ワイルドライブ”そのものだった。人類は少なからず自然をコントロールし始めた。生命維持のため、文明発展のため、そして利益獲得のために“ワイルドライブ”に介入していったのである。環境破壊や種の絶滅危機をもたらすのも、それを再生しようとするのも人類である。仮に人類が出現しなかったら？と考えるのは、もはや愚問であろう。必然として、今や人類をも含めた生態系がこの地球の自然、“ワイルドライブ”と認識されるべきなのだ。

「2000 ワイルドライブ写真大賞展」、厳選された作品群には、地球上の美しい風景や、生物が持つ驚異の営みが強烈に写し出されている。しかしながら、その奥底にこそ人類と自然の関わり、そして多大なる影響の果てがメッセージとして秘められているのである。感動と共に未来への課題と向き合わずにはいられない、そんな秀逸フォトの数々が、郷土の森新世紀のオープニングを飾る！ (Nakamura)

BBC ワイルドライブ誌 + ロンドン自然史博物館による

# 2000 ワイルドライブ写真大賞展

2001/1/13 ~ 3/18



遊びのあとで体を冷やすホッキョクグマ ケナン・ウォード (アメリカ)

- A : またまたワイルドライブがやって来るぞ！  
 B : よかった！いついつ？カメラマン個々で自然の捉え方が違うから、作品のメッセージも様々なのよね。また感動できる！素晴らしいわ。  
 A : せつがく約束したのに、去年は君一人でさつさと行っちゃうんだもんね。おかげで僕は危うく行きそびれるところだったよ。  
 B : あら、私のせいじゃないでよ。本当に興味があるなら、いてもたってもいられず会場に足が向くはずだわ。  
 A : そう言わちゃ身もつ々もないけどさ…、今度こそ早いうちに行きたいなあ。  
 B : 私は絶対行くわよ。自然の雄大さとテリトリー部分、両方とも伝わってくるんだもん。  
 A : たいした感性で結構だねえ。それだけ繊細だったら、いいかげんに僕の思いも…  
 B : 何ぶん言ってるの？いつしよに行くの？行かないの？  
 A : ハイッ、い、行きま〜す！

オランウータンの親子  
 マインシャー・イギリス





清白寺仏殿

## ▼ ここにも国宝建築が

東京でただひとつの国宝の建物を見なければ、東村山市の正福寺へどうぞ。そこには、歴史教科書の「鎌倉文化」のところで紹介される唐様（禅宗様）様式で建てられた仏殿があります。写真でよく載るのは、鎌倉の円覚寺舍利殿のほうですが、これと瓜二つなのが正福寺地蔵堂なのです。

端正に反り上がった軒、花頭に縁取られた扉と窓、波形模様の欄間など、全体に清楚な雰囲気の魅力です。円覚寺のは、廃寺になった尼寺太平寺の仏殿を戦国時代に移築したもの、正福寺のは、応永14年（1407）の造立であることが判明していますが、鎌倉の禅宗文化をよく伝えた建物といえます。

円覚寺は、蒙古襲来のさなかに幕府の執権北条時宗が建てた寺ですが、正福寺も縁起によれば、武蔵野に鷹狩に来た時宗が建てたことになっています。しかも、二つの寺は鎌倉街道上道でまっすぐ繋がっているではありませんか。

しかし、もうひとつ忘れることのできない唐様建築があまり遠くない所にあります。山梨市の清白寺仏殿です。円覚寺や正福寺と同じ臨済宗のお寺で、こちらにも国宝。府中から甲州街道を西に向かい、小仏峠と笹子峠を越えて、ようやく甲府盆地に下りてきたあたりにあります。JRの駅だと、中央本線東山梨駅の近くです。場所がらブドウ畑が多いのですが、桃の木の長い参道の奥に、桃畑に囲まれて、さながら「桃源郷」のごとく、実に優雅にその仏殿を訪れる人を迎えてくれます。

## ▼ 甲州の山あいの古寺

さて、清白寺の位置を地図で確かめてみると、逆三角形をした甲府盆地の北東隅にあたります。そのあたりから秩父奥多摩の深い山塊に向けて2本の山道が登っていることにも気が付きます。

ひとつは雁坂道。秩父盆地をめざすルートで、大昔、ヤマトタケルも歩いたといわれ、武蔵国の玄関口のひとつだったとも言えます。最近トンネルが開通しました。もう1本の道は、大菩薩の嶺を迂回しながら、青梅をめざしています。途中に御岳神社があり、北条時宗の祈願伝説があるのも思い出されます。

中世の甲斐国（山梨県）の国府は、今の御坂町国衙あたりではないかと考えられるので、国府から武蔵へ行くルートの要地に寺が建てられたことになります。

ところが、甲斐国府から武蔵国府へ向かう最短コースは、これとは別で、近世に五街道のひとつとして整備された甲州街道と重なります。すると、この道の笹子峠への登り口に、もうひとつ重要な寺があるのに気が付くでしょう。

勝沼町の大善寺。真言宗の寺で、鎌倉時代には幕府の安穩を祈る「関東祈祷寺」として、鎌倉とは深い繋がりを持っていました。実はここにも国宝建築があります。北条時宗の息子、貞時が弘安7年（1284）に建てた薬師堂（本堂）で、豪放な和様の建物が印象的です。大善寺の古文書の中に、嘉慶元年（1387）、甲斐国衙八幡宮の田の権利を大善寺に与える旨を国衙が述べた一通が含まれています。大善寺は甲斐国衙とも近い関係にあったと考えられます。

## ▼ 中世の甲州街道

ところで、甲斐国の守護を歴任したのは、国府に近い石和に本拠を持つ武田氏で、源頼朝以来の幕府のライバル、甲斐源氏の一族です。一方、武蔵は將軍家の知行国で、守護は置かず、国府の長官の国守は執権の北条氏が兼務することが多かったのです。いわば武蔵国府は鎌倉幕府の出先機関みたいなもので、両者は鎌倉街道上道で直結する仕組みでした。

すると、武蔵国府と甲斐国府をまっすぐ結ぶ道の政治的・軍事的な重要さも知られたものとなります。武蔵国府から山を越えて、甲府盆地に出たところに設けられた「関東祈禱寺」は、あたかも甲斐国に対して睨みを利かしているようではありませんか。

「中世の甲州街道」は確かにあったのです。

## ▼ 鎌倉から信州へ

いわゆる鎌倉街道上道は、鎌倉を出発し武蔵国府(府中)を通り、上野(群馬県)・信濃(長野県)方面へ向かっています。元弘3年(1333)、上野新田荘で旗揚げした新田義貞は、このルートを下り、府中分倍河原などで合戦を繰り返した後、鎌倉の幕府を滅亡に追い込みました。

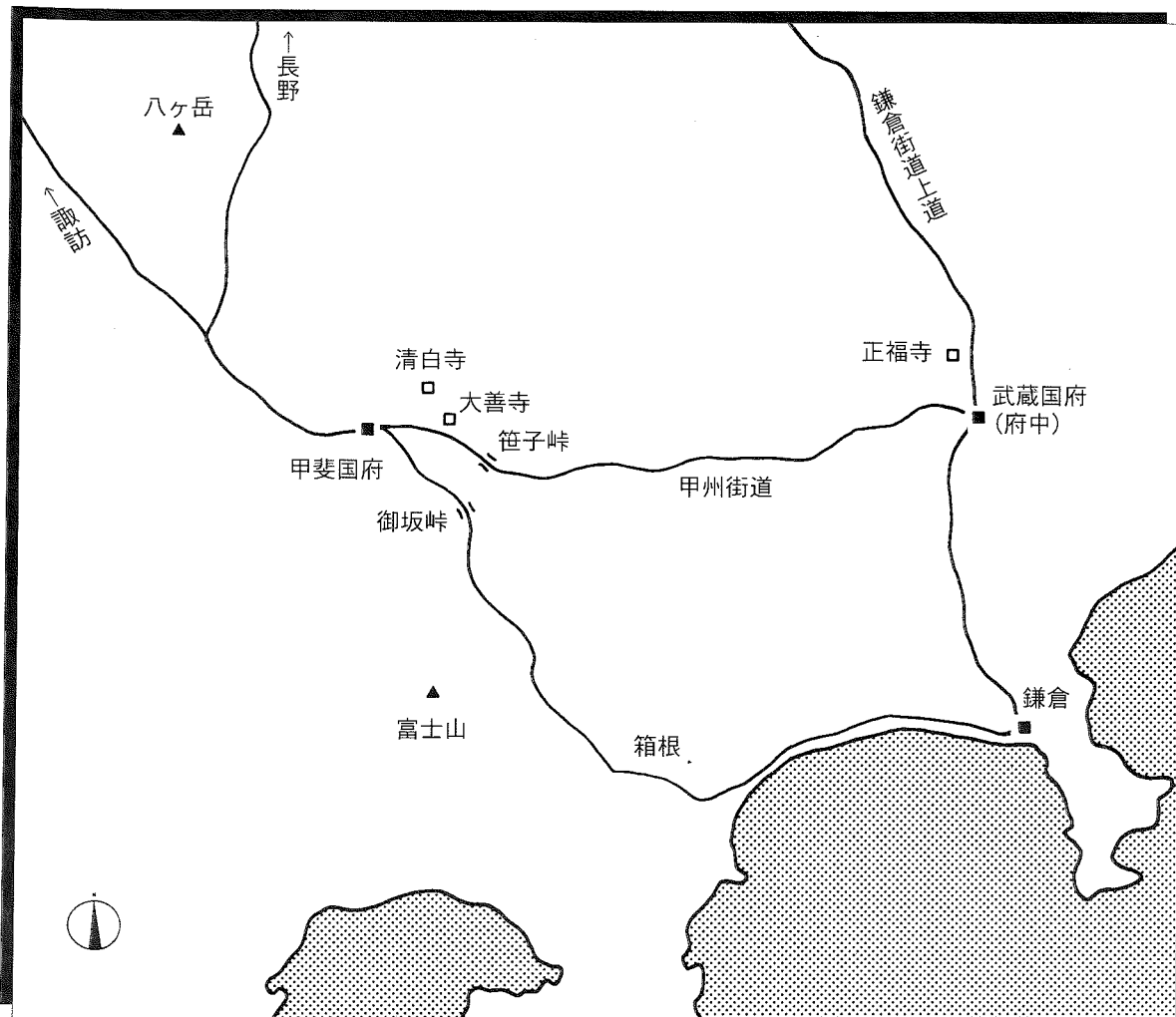
鎌倉街道は、この非常時に忽然と歴史の表舞台に登

場したのであって、普段はさまざまな人と物とが行き交う、交通の大動脈であったに違いありません。近年は、善光寺参りのための道、板碑を運んだ道としても注目されています。

鎌倉の北条氏にとっても、折りに触れ信州には用事があったと思います。頼朝も参詣したらしい長野市の善光寺。その門前には、後庁と呼ばれる国府の出先機関もありました。上田の別所温泉は北条氏の領地で、今も「信州の鎌倉」と呼ばれるように、国宝安楽寺八角三重塔などが往時を偲ばせてくれます。

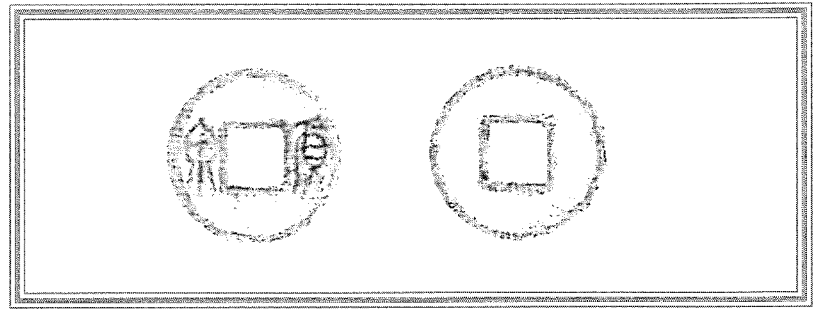
それから、諏訪大社。武神・軍神として武家の信仰が厚く、年四度の御狩の行事も盛大に行われました。そのひとつ御射山祭のスタジアムらしき跡が、霧が峰高原に遺っています。その階段状の遺構は、將軍や北条氏以下の棧敷席だとも言われています。

鎌倉から信州へ行く道には、鎌倉街道上道のほかに、箱根を経て御坂峠を越えて、甲府盆地に南から入る、もうひとつの鎌倉街道があります。北条氏と武蔵国との関係を考えれば、さらにもうひとつの道、すなわち、武蔵国府から西に向かい、峠を大善寺の前に降りて、甲斐国府を通り、諏訪をめざすか、あるいは八ヶ岳山麓を長野にめざすか、そんなルートも想像してみるのはいかがでしょうか。



# 埋められた渡来銭 整理作業中間レポート②

最近の発掘調査 番外編



貨泉の拓影（原寸 左：表 右：裏）

宮西町1丁目のビル建設予定地でみつかった大量の銅銭。常滑焼の大甕2つに銅銭がいっぱい詰められていたもので、すでに本誌44号で発掘速報、52号で途中経過の報告をしました。

52号では、大きい方の甕に入った銅銭で1番古いのは「開元通宝」だと報告したのですが、最近になって、それよりもずっと古い「貨泉」が見つかりました。そこで今回は、その「貨泉」を含めて、再び整理作業の途中経過を報告したいと思います。

「貨泉」は、大きい甕に入った銅銭の銭名確認作業で見つかりました。銭自体は薄く、少し曲がっていましたが、表面の文字ははっきりと判別できました。「貨泉」は文献によると、中国・新の国を建国した王莽が、西暦14年（天鳳元年）に発行した銅銭です。当時の日本列島は弥生時代でしたから、弥生時代の遺跡から発見されることがあります。ところが、中世に埋められた大量の銅銭の中から「貨泉」が見つかる例も、偶にあるのです。

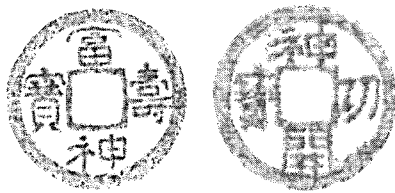
現在のところ、大甕に詰められていた銭の中で、最も新しいものは「朝鮮通宝」で、西暦1423年に朝鮮で発行されたものです。「貨泉」の発行は14年ですから、単純にいて1400年以上の差があることとなります。「貨泉」は甕の中に特別な納め方をしていた訳ではありませんので、「貨泉」もほかの銅銭も区別なく扱われ、埋められたといえます。このことは、当時、四角い穴があり、文字がある円形のものが貨幣として受けとめられていたことを示すのかもしれませんが、つまり、当時1400年も前の銅銭が使われていたのです。

1400年以上の時を経て、中国で発行された「貨泉」はいったいどのような道を通じ、どのように日本列島で扱われ、大量の銅銭とともに埋められるにいたったのでしょうか？

ところで、現時点の整理状況は、大きい方の甕に入った銅銭の再確認作業とともに、小さい方の甕に入った銅銭を甕から取り出し、枚数と種類の確認を行っている所です。その結果、大きい甕には90,690枚で、小さい甕には約60,000枚となっています。

小さい甕に入れられた銅銭は、最上面が1枚1枚バラバラで、甕の中央部あたりで縄紐で通したような塊の状態のものがありましたが、下の方も含めて大体がバラバラの状態に入れられていたことがわかりました。その点で、大きい甕に入った銅銭と同じ状態でした。ただ、銅銭の内容は、厚さや外観から、大きい甕より小さい甕に入っていた銅銭に質の良いものが多いようです。選んで入れたとしたら、その理由は为什么呢？

小さい方の甕の銅銭を取り上げたとはいうものの、両方の甕あわせて15万枚以上の銅銭があり、その確認作業にはもう少しの時間がかかりそうです。そのため現在も、様々な情報をみなさんに、できるだけ早くお届けできるように作業をすすめているところです。



中世にも使われた続けた古代の銭

中世に使われた遥か昔の銭は、「貨泉」ばかりではありません。日本の古代国家が铸造した、いわゆる本朝十二銭も、中世に埋められた大量の銅銭に混じって見つかることがあります。今回の出土品の中からは、七六五年に発行の「神功開宝」と八一八年に発行された「富寿神宝」が確認できました。



収蔵資料の紹介

# 縄文人が 埋めた 石 斧

深澤 靖幸

府中市の北端、都立府中病院の一带に武蔵台遺跡という大きな遺跡があります。一昨年、発掘調査が一段落し、膨大な量の出土品をはじめとする調査資料の全てが当館に移管されました。整理箱で1,000箱を超す遺物は、年代も性格も様々ですが、後期旧石器時代初頭の石器群、縄文時代早期の土器群、奈良時代の漆紙文書など、全国的にも注目度の高い資料が少なくありません。

ここで紹介するのはその一つ、縄文人が埋めた磨製の石斧です。

石斧は全部で6本。大きなもので長さ15.5cm、緑泥片岩や砂岩で作られています。これらの石斧は、土器に収納されて埋められていました。その土器の特徴から、埋められたのは縄文時代中期の終わり頃と判断できます。

さて、6本の磨製石斧はいずれも両刃で、専門家が「定角式」と呼ぶ形態のものでした。美しく整った姿形から、宝物的な性格を持つと考えられる石器です。とはいえ、実用であったことも確かで、大形品は縦斧で樹木の伐採に、小型品は横斧で加工に用いられたようです。つまり、6本の石斧は、木材加工に必要な道具一式が揃っていることになりません。

これらを収納した土器もまた珍

しく、瓢箪形で液体を注ぐための口を持っています。マツリに用いる特殊な土器として作られたのでしよう。

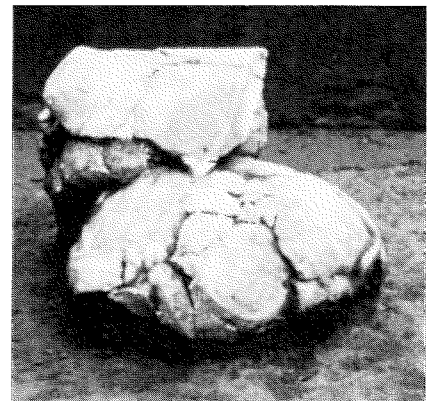
埋められたのが、当時の集落から200mも離れた地点であったのも興味深いところです。

武蔵台の縄文人は、マツリに使うべき土器に、宝物的な性格も持った石斧を納めて、集落のはずれに埋めたのです。

もちろん問題は、なぜ埋めたのか？ 一時的な保管か、人知れず隠したのか、呪術的な目的で埋めたのか…といった可能性が浮かびます。保管説や隠匿説を採るならば、石斧は大切なものでありながら、何らかの事情により再び掘り出されることのないものと解釈でき、呪術的な目的のもとに埋められたのであれば、もとより掘り出されることを意図しなかったことになります。

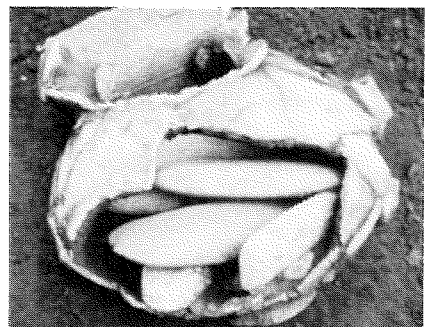
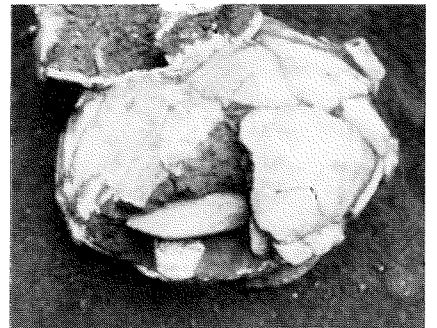
いずれにしても、武蔵台遺跡に埋まっていた石斧は、縄文人が何らかの目的を持って埋めたもので、縄文人の心の一端に触れたような気分させてくれる、そんな遺物といってよいでしょう。

ここで紹介した石斧と土器は、常設展示室で2001年4月から開催する《ミニ展17 縄文人が埋めた石斧》で展示します。



▲ 瓢箪形の注口土器に鉢形の土器が被せてあった。

▼ 鉢形土器を外し、瓢箪形土器の破片を取り上げると、綺麗な磨製石斧が姿を現した。



# ナチュラル セブン

## 第3話 「自然調査団西へ」

中村 武史

府中市自然調査団のスタッフは、何も生物分野に限らない。地理・地形に関わる方面で活躍を続けるメンバーも存在するのだ。俗に地理班と称される、このグループ主動の観察会、「段丘崖を歩く」で起こったエピソードを紹介しよう。すべては、事実に基づいた創造の世界……。

府中市を含む周辺の土地は、三段の平坦面と二つの崖からなる階段状地形である。多摩川沿いに発達する、このような地形を河岸段丘といい、その平坦面は川原が広がることによってできた場所である。これが相対的な隆起や、河川の運搬力の変化により掘り込まれて生じたのがこの段丘地形なのだ。現在の多摩川が流れる場所、すなわち多摩川低地より上の二段を低い方から順に立川段丘、武蔵野段丘と呼んでいる。また、崖の部分は河川の横方向の浸食により削り取られたもので、段丘崖という。多摩川低地と立川面の間は府中崖線、立川面と武蔵野面の間は国分寺崖線と称される。観察会は、国分寺崖線上を西に向かいながら、段丘の形成と地形が織り成す自然についてを語りとする主旨で計画され、終着地点には野川の源流である国分寺の真姿の池が選ばれた。

集合場所の武蔵小金井駅前では、シマムラ班長が困惑した表情でボヤク。「クワバラ氏とタカハシ氏は一体どうしちゃったんだい？もう出発の時間なのに。」地理班は6人のメンバーから構成されるが、ここに集まったのは内4名、2人が未到着なのである。「しょうがない、お客さんを待たせるのもアシだから、もう出発しよう。」一向は国分寺方面へと歩き出した。途中、滄浪泉園・貫井神社と続く湧水地を見学しながら解説を聴く。「段丘の地層は、浅い海の時代に堆積した上総層群の上にかつての川原であったことを示す証拠の武蔵野礫層、そして関東ローム、黒土と重なっています。上総層群は砂層ですが、所々に粘土の層があるため水をほとんど通しません。そのため地上に降った雨は、空隙のある武蔵野礫層まで浸透し、そこに水脈をつくります。段丘崖ではこの地下水脈が地表に現れるためにこのような湧水地が多く見られるわけでありませぬ。本

日向かう、真姿の池もその典型的なロケーションと言えるでしょう。」シマムラ班長の声は、いつになくトーンが高い。はて、…マ・ス・ガ・タ？

一方、場面は転じて、武蔵小金井を南に下った先の京王線武蔵野台駅前。どこかと同じような会話が飛び交う。「おかしいな、場所間違えちゃったかなあ…、お客さん一人も来ないし。」「もう集合時間15分オーバーですよクワバラさん、とりあえず目的地に向かいませんか。」「そうだね、予定では府中崖線を歩いて、最後はママ下湧水だったよね。」えっ、…マ・マ・シ・タ？

もう皆さんはお気付きだろう。両名は、観察会の場所を完全に間違えていたのである。崖線上を歩き、湧水地を目指すことは偶然にも両者に共通し、大いなる勘違いを与えてしまったのだ。府中崖線に沿っていくつかの湧水地があり、特に西へ進んだ先の矢川から谷保にかけては、その間に一部、青柳面という立川面よりやや低い段丘がある。この崖下を流れるのが、豊富な水量で知られるママ下湧水なのだ。

はるか上空より眺めれば、二つの異なる崖線上を調査団地理班の勇姿が平行して西を目指す情景

が展開していた。…果たして府中崖線上の二人が、自身の誤りに気付くのにそう時間はかからなかった。

真姿の池に到着した本隊は、湧き出す清水に魅せられながら、シマムラ班長の総括に耳を傾けていた。「段丘形成については大体理解できたでしょうか。段丘崖周辺で自然が豊かなのは、ご覧の通り湧水のお陰かも知れません。エ～、この自然がいつまでも…」と、ふいに背後から別の声で、「…続くと良いのですが、都市化の波がねえ。」まるでヒーロー登場よろしく、府中崖線から北上した二人が最後の最後で間に合ったのだ。あっけにと取られている参加者の前でクワバラ団員が締める。「思いがけず府中崖線を歩いてまいりましたが、住宅化で農地が少なくなったせいか、地下に浸透する雨水の量が減り、湧水そのものがなくなりつつあるような気がしたんですが…こちらの崖線はどうでした？」結果的にお互いが観察した二つの崖線について情報交換が可能になった。災い転じて何とやらである。



多摩地域における段丘面・段丘崖の分布

※ あるむせお イタリア語で「博物館で」「博物館にて」の意